

し。

何たる喧噪ぞ、轟然として林中に襲ひ來りたる  
 吁是れ何たる何等の雜鬧ぞ、栗鼠は枝に武者振着  
 き、老狐は奔竄し、兎は身を屈め耳を尖らし、憶  
 病なる牝鹿は廣野を求め、牡鹿は近く茂みに姿を  
 かくし、鴨、鴨、鴛鴦など葦間に遁げ匿くる、夏々  
 の音は續き、鬻々の吠は頻なり、其間時々銳聲爆  
 然として叢に轟く、げに總ての禽獸の安穩を攪亂  
 するものは、狩獵なり。……其寢床より驚起  
 して、兎は脱然として走り、彈丸は送り、走狗は  
 跳びかゝり、斯くて討ちとられたる禽獸は、皆獵  
 夫の囊に投げ入れらる。暴き狩獵は尙暴れて、林  
 の邊にて、鷓鴣の一群は飛び起ちて、砲聲は更に  
 爆發し、又もや其半ダースは地に落ちぬ。此雜鬧  
 の近づきしより、葦間を高く飛び上りて、池の鵜

鷺、鴨など命からく、逃げ翔る。

八十

喧噪は尙遙に續きて遂にやうく止むや、忽に  
 して、啄木鳥は再び蟲を求めて、丁々と樹を敲き  
 始め、鷺、山雀、知更鳥、鷓鴣等羞しげに出で來  
 る。

是に於てか、散り行く木の葉と、彈丸に仆れし  
 禽獸とが、道獨り行く旅人に起さしめたる「死の  
 感想」も、何時しか消えて、斯くまでも魔はしく  
 秋の林を彩り給ひしその神は、げに「生命の禱」  
 なりといふ意識は、自から起らざるを得ざるなり

(まか生 譯)

●學びの窓

●女子高等師範學校

來年四月文科理科技藝科

に各二十五名の生徒を入學せしむる由志願者は來

月五日迄に各府縣廳へ履歷書及願書を差出すべし  
 となり 但し年齢は十七年以上二十二年末満にして夫を有せざる者身体健全品行方正師範女子部高等女學校卒業以上

●女子大學の近況 同校には從來校内には家族の寮舎三棟と校外に二家族の寮舎二棟ありし所、

今學期より樺山伯の好意によりて、同伯邸内に二家族の寮舎二棟を設け、樺山寮と名け、寺田勇吉

氏の邸内に森村市左衛門氏の好意により三家族の寮舎一棟を建て、豊明寮と稱し、各七十餘名の生徒を收容し、之にて大凡全生徒の半數即ち四百名の生徒を收容することとなり、自宅以外より通學する者止を得ざる事情のもの外、悉く入寮せしめ嚴重に監督保護することとなしたる由。

●森村豊明會の美譽 森村市左衛門氏等の組織せらるる、豊明會は日本女子大學校の旨趣を賛成せられ、今回金參萬圓を同校に奇附せられたる由

にて、其書狀及目錄は左の如し。

謹啓時下愈々御清勝幸慶賀候陳者、今我邦に於ける婦人の教育に關しては小生共聊か愚見を有し居候處、貴下多年誠意御盡碎の功と博愛諸家の有力なる贊助とに依り近頃日本女子大學校の創設を見るに至りしは、寔に邦家の爲め欣喜措能くはざる所に御座候此上は貴下御始め御指導宜しきを得て將來國民幸福の大本なる良妻賢母たるへき人材の貴校より續々輩出あらんことを千祈萬禱の至りに堪はず、仍て此の美譽を榮し乍些少別紙目錄の通金參萬圓貴校基本金中へ寄附致し度御受納あらば本懐の至に存候、先は右まで得貴意度如此御座候敬具

明治三十五年九月廿二日 森村豊明會

會員 森村市左衛門 森村 勇 大倉 孫兵衛

村井 保固 新井 領一郎 廣瀬 實榮

永井 義三郎 諸葛 小彌太

日本女子大學校長成瀬仁藏殿

目錄

一金參萬圓也

右者日本女子大學校創設之旨趣を榮し基本金之中へ寄附致候也

明治三十五年九月廿二日 森村豊明會

北海道短信

●奥村五百子女史の來道 帝國婦人會の會員募

集のため八月中來道せられ、各地に於て演説を催されぬ、到處聴集者多く殊に史は老体なるにかはらず尙壯々快辨を以てせられたれば眞に懦夫をして起たしむるの感ありき、

◎文部視學官の來道 隈本文部視學官は七月中来道せられ、各地教育の狀況を視察せられたり。

●九月の北海天地 蟬聲音を絶ちて三伏の炎暑何時しか去り、玉露團々叢中僅に昆虫の悲曲を奏するのみ、楳前の梧桐秋聲を報するも亦近きにあらん乎

短 信 (九月十八日)

高知より

●久しく旅行中にて、通信相怠り申し候。

●いづくも同じ事ながら、當地も夏期中は講習會

大流行にて、實業女學校の音楽、中村女藝傳習所

の家政、其他高等女學校、勝賀瀬裁縫傳習所等、處々に割京家政などの講習行はれたりしが、講師生徒共何れも熱心にして、餘程好果を得たるやう承り候。

●勝賀瀬裁縫傳習所は、今九月より學校組織に定め、勝賀瀬裁縫女學校と稱し、又棚橋ふで、乙武うたの二女子により新に私立土佐裁縫女學校と稱するもの設立せられ候。

●本縣女教員は年々缺乏を告ぐるにより、縣下にては高等女學校に一ヶ年の講習科を置き、同校本科卒業生を入學せしめて之を採用し來りしが、尙之にても不足を充すに足らざるを以て、今回縣師範校内の小學正教員講習科男子部生徒の近々卒業するを幸ひ、女子の生徒を入學せしむることに決定いたし居り候。

●**縣下小學女教員は來年一月より服制を一定、何れも袴を着することに内定いたし居り候。**

### ●新刊紹介

▲**ろびんをんくるーそー**。その一。鈴木虎市郎編  
この本の出来をいつて見ると、先づ日本での無類の書物だといつてよい。即高等師範學校附屬小學校尋常四年生が拵らへたのである。修身としてロビンソンの話を教へつたのを同級の生徒が作文にした夫を編んで一冊としたので、挿畫も同じく生徒ので、夫を少年文學として立派な体裁で出版されたのである。中々面白い考ま、いつてよい編者の言によると文は兒童の意を其儘になし置かんと思ひ、極めて不都合なき場合の外は凡て手を入れず云々との事であるが、どうして中々立派なもので、選さんそののげだ。先づ大体の出来は如此で頗る面白いが、さてこれを出版して讀物にするのは、果してどうであらうか、然しこれはこゝで言ふべき限りでないから止さう。(定價十五錢 本郷森川町育成會發行)

▲**虫の譜** 毎月一回 發行所 育成會

これは學生俱樂部の第三卷第六號のこゝで、珍袖形の頗る的ハイカラ本の体裁である。表紙もさし盡も中々立派に出来て居る劈頭時文欄のブックローームは當時學生の一讀すべきもの

▲**繪はがき俱樂部** 月一回 (定價一冊十二錢)

繪はがき大の冊子で、俱樂部の目的はつまり部員相寄りて、面白

い趣味ある繪はがきを案出しようといふので、號必らず四枚の繪はがきがついて居る、餘程奇麗だ其他には小品文、和歌、詩、俳句等を載せて居る。(二ヶ月分十錢 三ヶ月前納で申し込むこと)

▲**女子新聞** 京橋區鈴木町十一番地 女子新聞社

毎週一回の發行で、紙質も奇麗で、記事も豊實で論說や小説や雜報等見るべきものが甚だ多い。殊に料理や禮節のことが詳しい (定價一ヶ月十錢)

## 會報

●**幹事會** 九月廿五日女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會來十月の常會の事に付議す。出席者は中村主幹大島、和田、雨森、佐々、松村、野口、林、下田幹事外に東基吉氏の十氏なりき。

### 入會

- 奈良縣高等女學校
- 廣島縣師範學校
- 東京麹町區飯田町四丁目一六
- 女子高等師範學校寄宿舎
- 同
- 廣島縣安藝郡吳港三津田小學校
- 鹿兒島縣鹿兒島市鹿兒島幼稚園
- 神戸市中山手通五丁目十二番地

- 平野 謙
- 瀧山 幸
- 江原 那
- 奈良 一
- 益田 枝
- 城戸 龍
- 寺内 顯
- 池田 孝





號十第卷二第もど子さ人繼

一金十	一金一	一金一	一金七	一金十	一金十	一金二	一金五	一金二	一金二	一金五	一金二	一金二	一金二	一金二	一金二	一金二	一金四
錢	圓	圓	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢
至三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
八月	五月	六月	九月	三月	九月	九月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月	八月

北村きた	吉澤幸	池田かよ	山根とし	益田一枝	奈良あい	岩田ゆき	内田たれ	藤岡さき	渡邊すみ	根來まさる	相川みれ	木村さら	村井あい	安東てい	高木なみ	宮崎もさ	小林ふし	赤江よれ	小柳ゆき
------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

一金六	一金一	一金一	一金五	一金三	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五	一金五
錢	圓	圓	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	圓
至三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
十二月	七月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月	四月

宮本こすえ	大平みち	田中織衛	下瀬たつの	鳥居敏三郎	加納貞子	近藤つるよ	安達かつ	菱沼小夏
-------	------	------	-------	-------	------	-------	------	------